

## 実践報告

### 看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査

香月 毅史<sup>1)</sup>, 荒井 淑子<sup>1)</sup>

#### 要旨

2008年度のA大学看護学部海外研修に参加した12名を対象に、独自に作成した質問紙を使って、研修前後における学生の英語学習動機と英語学習に対する認知的評価および研修に対する意識の変化を明らかにすることを目的に調査した。

その結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生の英語学習動機は、研修前後において有意な変化は認められなかった。
2. 英語学習に対する認知的評価では、「スキル認知」(英語の学習方法がわからないという評価)の得点が研修後に有意に低下し、学生が英語の学習方法について理解を深めたことが示唆された。
3. 研修に対する学生の意識は、研修後に「大学の講義聴講」と、「私は英語が得意だ」の得点が有意に増加し、本研修プログラムは学生の期待に概ね応えられるものであり、学生は英語に対する苦手意識を軽減することができた。

キーワード：看護学生 短期海外研修 英語学習動機 英語学習に対する認知的評価

#### I. はじめに

近年の医療における国際化の流れを受け、国際協力の現場では多くの人材が活躍し、海外からの人材受け入れも始まっている。大学基準協会では看護学学士過程卒業生が「知的好奇心や広い視野を持って多様化された価値観を認識する能力を身につける」ことを提言し、看護学学士教育の到達目標に国際性の獲得をあげている(澤田, 2002)。そのような現状を受けてA大学看護学部においても2009年度から改定された看護教育カリキュラムで、国際関係論、国際看護論などのグローバルな視点を育成するための講義内容と共に学生の英語学習意欲の充実を図り、「国際的な視野を持って活動できる能力を養う」という教育目標を指針として2007年度より短期海外研修(以下、研修)が実施されている。

A大学看護学部の研修は、参加した学生が国際的視野を広げることだけに留まらず、海外の医療・看護の

事情について学び、わが国の医療・看護について考察することを目的に行なわれている。また、研修は例年8月末から9月上旬の夏期休暇中の8日間を使って行われ、現在まで2回実施され、1~4年生の延べ30名の学生と4名の教員が参加した。過去2回の海外研修の内容は米国ワシントン州のワシントン州立大学を中心とした医療関連施設の訪問、見学、講義聴講、異文化体験であった。

社会心理学的調査では、国際的志向性と英語学習動機概念モデルが提唱され、両者の関連が検証されている(八島, 2001)。そこで本研究では研修に参加した学生の国際的志向性の変化を知るために、英語学習動機と英語学習に対する認知的評価の変化に焦点をあてて調査することを試みた。以下に2008年の研修に参加した学生を対象に行ったアンケート調査の結果を報告する。

1) 上武大学看護学部

## II. 目的

研修に参加した学生の、英語学習動機と英語学習に対する認知的評価、及び研修に対する意識について、研修前後の変化を明らかにすることを目的とした。

## III. 研修の概要

本研修は、海外体験を通してアメリカの医療・看護に触れる、国際的視野を広げる、自己成長を促す、の3点を目的として実施された。

参加者の募集方法は、全学年を対象とした任意参加であった。参加者の募集と並行して研修4ヶ月前から研修説明会が開かれ、参加者が確定した後は4回の事前説明会が設定され延べ6時間を使って対象者に訪問予定の施設、米国の医療事情、旅行準備についての説明が行われた。

研修は、アメリカ合衆国ワシントン州のワシントン

州立大学と近郊の医療関連施設として2008年9月8日から15日までの全8日間の日程で行われた(表1)。研修プログラムは、ワシントン大学キャンパス見学から始まり、シアトル市内の保健・医療・福祉施設の視察を行った。研修の8日間のうち現地での日中の活動時間は延べ65時間、そのうち施設の見学が約30時間(46%)、2施設での講義聴講が約5時間(8%)、大学や施設での交流が約10時間(15%)、市内観光が約20時間(31%)であった。市内観光は研修の1日目と6日目に設定され1日目はガイドの引率によるツアー、6日目は学生が各自で自由に街中を散策する形式で行われた。宿泊施設は主に現地大学の学生寮を使用し参加学生同士が2名で1部屋を使用した。4日目と5日目の宿泊は、シアトル市内のホテルに宿泊し、市内自主研修を実施した。

表1 平成20年度看護学部海外研修プログラム

月 日	研修内容
9月 8日(月)	シアトル到着後、専用バスで市内研修 ◇ ワシントンキャンパス内のMcCarty Hallにて レジデントアドバイザーによるオリエンテーション
9月 9日(火)	◇ワシントン大学の学生による案内で、ワシントン大学施設見学(図書館、公園など) その後、各自キャンパス内を散策 16:00マリナーズ対テキサスレンジャーズ観戦
9月10日(水)	◇ UW Medical Center、Health Science Center自主見学 ◇ ワシントン大学の教員による講演 (講師: Yoriko Kozuki, Ph.D., A.R.N.P.) ◇ ワシントン大学の学生とフェアウエルパーティー
9月11日(木)	◇ 「Seattle Keiro Nursing Home」 視察レクチャーQ&A+施設見学+利用者との交流 ◇ 「Anderson House」 視察レクチャーQ&A+施設見学+利用者との交流
9月12日(金)	◇ 「Cancer Lifeline」 視察レクチャーQ&A+施設見学 ◇ 「Seattle Children's」 視察レクチャーQ&A+施設見学
9月13日(土)	◇シアトル市内自主研修
9月14日(日)	◇帰国のためタコマ空港へ
9月15日(月)	成田国際空港到着

研修中は学生同士のコミュニケーションが中心となるため主な使用言語は日本語であった。学生の大半は英語を使つてのコミュニケーションに不安な様子であったが、英語に触れる機会は講義、案内、街中やキャンパス内での交流など多くあった。学生が英語を

使つて話す場面は、フェアウエルパーティーや市内観光の場面で見られた。

#### IV. 方法

##### 1. 調査対象および調査方法

2008年度A大学看護学部海外研修に参加した12名(女子9名、男子3名)のうち研究の趣旨に同意を得られた学生を調査対象とした。調査は独自に作成した質問紙を用い、無記名方式により研修実施前後に実施し、回収は専用の回収BOXを用いた。調査時期は2008年8月～9月とした。

##### 2. 調査内容

1) 英語学習動機：英語学習動機尺度(近藤, 2006)を使用した(表2)。英語学習動機尺度は、英語の知識・技能を活かし得る分野として、「趣味」(学習自体が楽しい)、「教養」(知力を鍛えるため)及び「仕事」(社会生活に生かす)の3因子を設定し、各因子4項目ずつ、計12項目で構成されている。回答には「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までを6件法で尋ね、1点から6点を配し、得点が高いほど肯定的評価が高いことを表している。

表2 英語学習動機尺度の項目

「趣味」
「海外旅行の時に役立つ。」
「外国の小説やエッセイ、雑誌などを読むことに役立つ。」
「映画のセリフや外国の曲の歌詞を理解することに役立つ。」
「外国人と交流する時に役立つ。」
「教養」
「異なった文化に対する知識を深める。」
「言語の構造や規則についての知識を深める。」
「より広い見地から物事を考える力をつける。」
「言語を理解したり表現したりする力を伸ばす。」
「仕事」
「仕事で外国人の患者さんとコミュニケーションをとる時に役立つ。」
「仕事で外国の文献(看護学書・看護学専門誌)を読む時に役立つ。」
「仕事で報告書や論文を英語で書く時に役立つ。」
「仕事で研究発表を英語で行う時に役立つ。」

(近藤 2006) 著者により一部改変

2) 英語学習に対する認知的評価：英語のスキル認知・コストの認知尺度(塩谷1995)を使用した(表3)。英語のスキル認知・コストの認知尺度は、「スキル認知」(英語の学習方法がわからない)、「コスト認知」(英語の学習が辛い)の2因子を設定し、各因子10項目ずつ、計20項目で構成されている。回答には「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までを6件法で尋ね、1点から6点を配し、スキル認知の得点が高いほど、英語の学習方法がわからないという評価を表し、コスト認知の得点が高いほど英語の学習に対する身体的精神的負担が大きいという評価を表している。

3) 海外研修に関する学生の意識：独自に作成した「海外研修に関するアンケート」を使用した。「海外研

修に関するアンケート」は、「大学の講義聴講」「異文化に触れる」「米国大学のキャンパスライフ」「米国人学生との交流」「英語力の向上」「医療施設の見学」で構成される「期待」に関する6項目、「日米の生活習慣の違い」「気候の違い」「生活習慣の違い」「言語コミュニケーション」「研修グループ内での人間関係」「ドミトリーでの生活」「食事」で構成される「不安」に関する7項目、「私は英語が得意だ」「研修に参加して自身の英語力が伸びると思う」で構成される「自信」に関する2項目の計15項目から構成され、研修前後に用いた。

研修前には「本研修プログラムに期待していること」「研修に関して不安に思っていること」「英語力」について尋ね、回答を求めた。研修後には研

表3 英語のスキル認知・コストの認知尺度の項目

「英語のスキル認知」	
「※英語の勉強法がわかっている。」	
「英語をどう勉強したら授業について行けるのかわからない。」	
「※英語のいろいろな勉強方法を知っている。」	
「英語の勉強の仕方がよくわからない。」	
「※自分の英語勉強法がある。」	
「あまり英語の勉強方法を知らない。」	
「※英語の勉強のすすめかたがわかっている。」	
「※気楽に英語の勉強を始められる。」	
「※わりとすぐに英語の勉強が手につくほうである。」	
「英語の勉強になかなかとりかかれない。」	
「英語のコスト認知」	
「※英語の勉強はそれほどいやではない。」	
「※英語の勉強をするのは苦にならない。」	
「英語の勉強をしてもすぐに気が散る。」	
「英語の勉強を続けるのはたいへんだ。」	
「英語の勉強をするのはめんどろである。」	
「なかなか英語の勉強をする気にならない。」	
「どう勉強したら英語の理解がすすむのかわからない。」	
「※英語の勉強の工夫の仕方がわかっている。」	
「どう勉強したら英語の成績が上がるのかわからない。」	
「※英語の勉強に集中しやすい。」	
※印は逆転項目	(塩谷 1995)

修前に使用した質問紙と質問項目は同様であるが「本研修プログラムで有効だったこと」「研修で困ったこと」「英語力」について尋ね、回答を求めた。回答には「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までを6件法で尋ね、1点から6点を配し、得点が高いほど肯定的評価が高いことを表している。

### 3. 分析方法

- 1) 英語学習動機尺度における下位因子である「趣味」「教養」「仕事」と、英語のスキル認知・コストの認知尺度における下位因子「スキル認知」「コスト認知」の各得点について、研修前後における平均値と標準偏差を算出した。研修前と研修後の差の検定は、Wilcoxon符号付順位和検定を使用した。
- 2) 海外研修に関するアンケートにおける「期待」「不安」「自信」に関する計15項目の各得点について、研修前後における平均値と標準偏差を算出した。また、研修前と研修後の差の検定は、Wilcoxon符号付順位和検定を使用した。

さらに、「期待」「不安」「自信」の3つの要素について、研修前後における平均値と標準偏差を算出した。なお、分析にはSPSS 12.0Jを使用した。

### 4. 倫理的配慮

対象者に対して口頭で調査目的、方法、データの使用目的について説明を行い、同意を得た。また、質問紙への記入は任意であること、無記名であること、アンケートの結果は全く成績に影響を与えないこと、調査途上での棄権は自由であることを伝えた。データの管理においては「連結不可能匿名化」を行い、個人と符号付データとの対応表を残さない方法をとった。また、2009年6月に上武大学倫理審査委員会に研究内容の公表について審査を受け承認を得ている。

### 5. 用語の操作的定義

英語学習動機：英語を学習したいと思う意欲の基になる要因で、趣味・教養・仕事の3要因からなる。  
英語学習に対する認知的評価：英語の分かり難さと、英語の学習のし難さをいう。

V. 結果

1. 基本属性

調査対象12名から有効な回答が得られ(回収率100%)、対象者は2年生9名、3年生3名で、平均年齢は19.3歳であった。

2. 英語学習動機と英語学習に対する認知的評価の研修前後の変化

研修前後における英語学習動機尺度および英語のスキル認知・コストの認知尺度の各下位因子得点は図1・図2の通りであった。

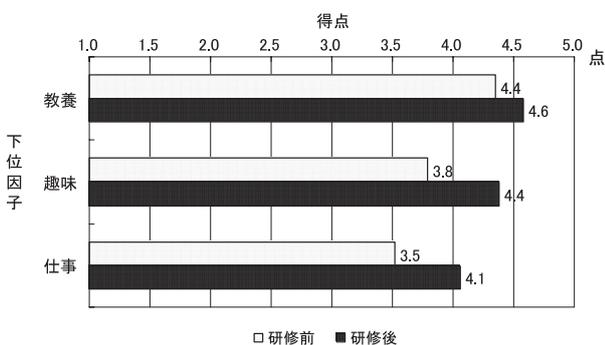


図1 研修前後における英語学習動機尺度の下位因子得点

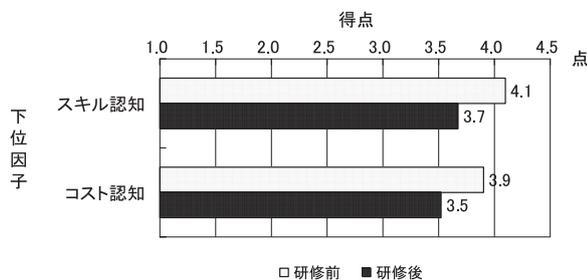


図2 研修前後における英語のスキル認知・コストの認知尺度における下位因子得点

英語学習動機尺度における下位因子得点をみると、研修前後ともに、「教養」「趣味」「仕事」の順に高かった。また、研修前後の変化量は「趣味」(+0.6)、「仕事」(+0.5)、「教養」(+0.2)と、全ての下位因子得点は増加していたが、研修前後におけるWilcoxon検定では、全ての下位因子で有意差が認められなかった。

英語のスキル認知・コストの認知尺度における下位因子得点をみると、研修前後ともに「スキル認知」が「コスト認知」より高かった。また、研修前後の変化は「スキル認知」(-0.4)、「コスト認知」(-0.4)であり、

研修前後におけるWilcoxon検定では、「スキル認知」において研修後の得点が研修前に比べ有意(p<.05)に低かった。

3. 研修に関する意識の変化

研修前後における、学生の海外研修に関する意識は図3-1、図3-2、図3-3の通りであった。また、学生における「期待」「不安」「自信」の3要素の意識は図4であった。

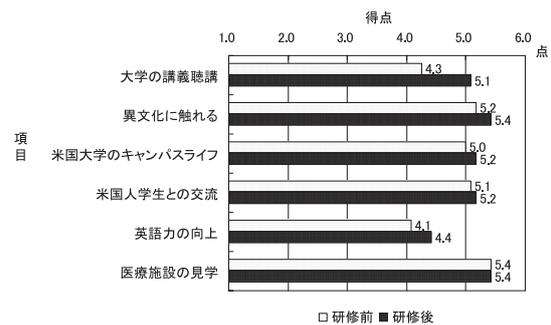


図3-1 研修プログラムに対する期待と実際に有効だったこと

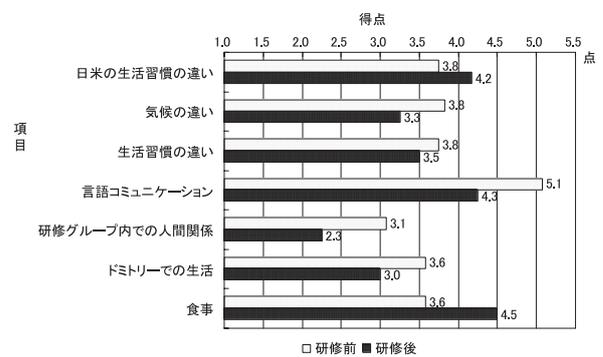


図3-2 研修に伴う不安と実際に困ったこと

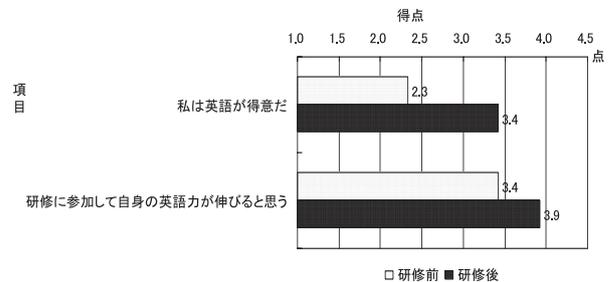


図3-3 英語に対する意識

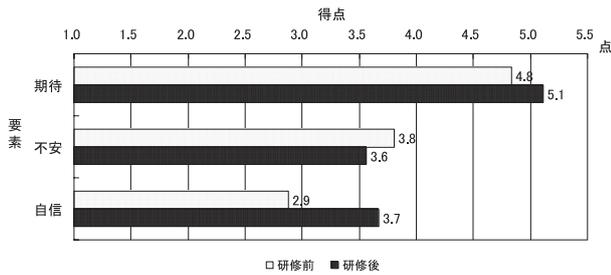


図4 研修前後における学生の海外研修における意識の3要素得点

学生の海外研修に対する意識は、研修前は「期待」「不安」「自信」の順に得点が高かったが、研修後は「期待」「自信」「不安」の順に得点が高かった。また、研修前後の変化をみると、「期待」「自信」は研修後の得点が研修前に比べ増加していたが、「不安」は研修後の得点が研修前に比べ減少していた。

「期待」に関する6項目では、全ての項目において研修後の得点が研修前に比べ高く、研修前後におけるWilcoxon検定では、「大学の講義聴講」で有意差( $p < .05$ )が認められた。「不安」に関する7項目では、「日米の生活習慣の違い」「食事」において、研修後の得点が研修前に比べ高く、それ以外の項目では研修後の得点が研修前の得点に比べ低かった。しかし、研修前後におけるWilcoxon検定では、全ての項目で有意差は認められなかった。「自信」に関する2項目では、いずれの項目においても研修後の得点が研修前に比べ高く、研修前後におけるWilcoxon検定では、「私は英語が得意だ」で有意差( $p < .05$ )が認められた。

## VI. 考察

### 1. 研修に対する英語学習動機と英語学習に対する認知的評価の変化

英語学習動機尺度における下位因子得点をみると、研修前後ともに、「教養」「趣味」「仕事」の順に高く、研修後に全ての因子得点が増加していた。これは、学生が研修で実際に英語を聞いたり話したりする機会を得たことや、うまく意思疎通が図れたという成功体験を通して、英語学習を楽しみながら行うことや、社会生活に生かすためにさらに勉強しようという学習動機が高まったことが推察される。しかし、研修前後で有意差はみられなかったことから、今後は英語学習のプログラムを取り入れるなど、研修内容をさらに充実させる必要が示唆された。

また、英語のスキル認知・コストの認知尺度における下位因子得点をみると、研修前後ともに「スキル認知」が「コスト認知」より高く、英語の学習について学習方法がわからないという評価が、英語の学習が辛いという評価を上回っていたことが明らかになった。このことから、学生が英語学習の方法を修得できるような研修プログラムの導入も必要であることが示唆された。しかし、研修後に英語の学習方法がわからないという「スキル認知」が有意に低下していたことから、英語の経験型学習である海外研修を通して、英語学習に対する抵抗感が薄れ、研修での体験が学生にとって英語学習のヒントやきっかけになったと推察できる。

### 2. 研修に関する期待・不安・自信

学生の海外研修に対する意識は、研修前後ともに「期待」の得点が他の要素に比べ高く、研修後には得点が増加していた。研修プログラムに対する研修前の期待も高かったが、研修後には研修プログラムが期待以上に有効であったと評価していたことから、本研修プログラムは学生にとってある程度満足のいくものであったと推察される。中でも「大学の講義聴講」の項目は、研修後に有意に得点が高かったことから、今後の研修プログラム検討において示唆を得た。また、「自信」の得点も研修前に比べ研修後に増加しており、中でも「英語が得意だ」の項目は研修後に有意に増加していた。これは、研修を通して英語圏の環境に多少慣れたことや、英語によるコミュニケーションの成功体験が影響していると推察されるが、英語が得意になったというよりは英語に対する苦手意識が減少したものと考えられる。さらに、「不安」の得点は研修前に比べ研修後に減少しており、研修前に不安に思っていた以上の不便さや困難は少なかったと推察される。しかし、「日米の生活習慣の違い」「食事」の項目においては、研修後の得点が研修前に比べ高かったことから、今後の研修プログラム検討における課題が見いだされた。

## VII. まとめ

2008年度のA大学看護学部海外研修に参加した12名を対象に、独自に作成した質問紙を使って、研修前後における学生の英語学習動機と英語学習に対する認知的評価および研修に対する意識の変化を明らかにすることを目的に調査した。

その結果、英語学習動機では研修前後において有意な変化は認められなかったが、英語学習に対する認知

的評価では、「スキル認知」の得点が研修後に有意に低下し、学生が英語の学習方法について理解を深めたことが示唆された。

また、学生は海外に身を置き英語に取り巻かれて過ごした8日間の研修を通して、英語に対する苦手意識を軽減することができ、今後の英語学習の取り組み方を再考するきっかけになったものと推察される。

#### Ⅷ. 研究の限界と今後の課題

本調査は、A大学における短期海外研修参加者を対象に行なっているため、対象者数が少ない。また、集団の特性のみの言及であり、個人の属性は配慮されていない点も、学習動機や学習に対する認知的評価といった個人的要因の影響が大きいと考えられる視点での分析には限界がある。

本研究を足がかりとして、今後は対象者の個人的要因を配慮した分析や、非参加者との比較によって効果を立証すること等が課題となる。また、研修前の英語学習や、研修後の継続学習支援の方法等も検討していきたい。

#### 引用文献

- 荒井淑子, 渡邊竹美, 香月毅史(2008)平成20年度 海外研修報告 - 第2回看護学部学生海外研修を実施して - 上武大学看護学部紀要(4) 41-46
- 浜畑章子, 片岡由美子, 米田雅彦 他(2004)看護学生の国際交流に関する意識調査 愛知県立看護大学紀要(10) 27-32
- 市川伸一(1995)学習と教育の心理学 岩波書店 東京
- 片岡由美子(2006)学生海外研修の概要とその課題 愛知県立看護大学紀要(12) 59-66
- 近藤真治.(2006)看護学生の英語学習動機、福井大学医学部研究雑誌7巻1-2 1-5
- 久保信子(1997)大学生の英語学習動機尺度の作成とその検討日本教育心理学会誌 45 449-445
- 澤田進 編(2002)21世紀の看護教育(35)大学基準協会
- 塩谷祥子(1995)高校生のテスト不安及び学習に対する認知的評価と認知的評価との関連 Japanese Journal of English Psychology(43) 125-133
- 曾田陽子, 飯塚雄一(2000)短期海外研修における異文化体験 島根県立看護短期大学紀要(5), 51-58
- 八島智子(2001)「国際的志向性」と英語学習モチベーション. 外国語教育研究 第1号 81-93.